第 25 回　龍頭が滝案内

「大町桂月と、龍頭が滝」　（その１　瀧は、松笠村の龍頭瀧が第一也。）

今回のテーマは、「大町桂月（読み：オオマチ　ケイゲツ）と、龍頭が滝」です。

大正 7(1918)年に、飯石郡役所より出版された『飯石郡誌』には、龍頭が滝の説明箇所に、「大町桂月」という名前が、記されています。

この大町桂月（以下、「桂月」と呼びます。）とは、どういう人物でしょうか？

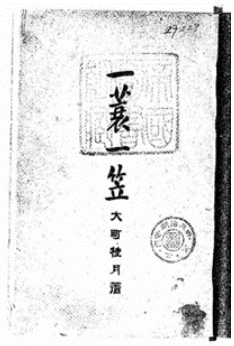
桂月は、明治 20 年代から大正にかけて活躍した、お酒と旅をこよなく愛する、当時たいへん著名な歌人、詩人、随筆家、評論家、旅行作家でした。明治２(1869)年、土佐高知の生まれ。桂月はペンネームで、本名は芳衛（ヨシエ）です。大正 14(1925)年６月、56 歳で没。東京帝国大学在学中に、『帝国文学』という雑誌の創刊にあたり、編集委員の一人となって、文芸評論や詩を同誌上に掲載し、文名が上がります。この雑誌は、のちに芥川龍之介が、『羅生門』を発表した雑誌です。大学卒業後、明治 32(1899)年４月、義兄が教頭をしていた縁で、島根県簸川中学校（大社高校の前身。校舎は、現在の出雲高校の敷地内にありました。）の国語の教師として着任します。中学との契約期間は３年間だったのですが、２年目の明治 33 年８月の夏休みに帰京し、そのまま退職してしまいました。

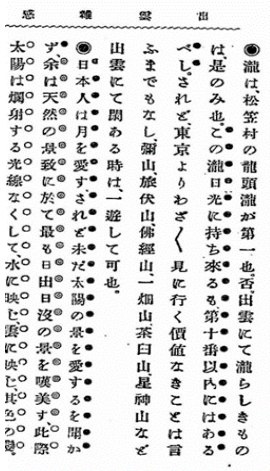
帰京後は、大手出版社である博文館に入社し、日本初の総合雑誌『太陽』などに評論や随筆を発表。明治 37(1904)年には、与謝野晶子の詩「君死にたまうこと勿れ」を批判したことから、論争にもなっています。このほか、人生訓や処世訓、史伝なども書いていますが、なにより旅行を好み、日本全国を旅し紀行文を書き、晩年は朝鮮半島、中国大陸にも渡り、紀行文作家（旅行作家）として、第一人者でした。

島根にいたのは、明治 32 年４月から１年５か月の短い期間ですが、この期間中に、美保関、三瓶山、断魚渓、鬼の舌震、立久恵峡、大山などの名所、旧跡を精力的に訪ねています。龍頭が滝にも、このときに足を運んでおり、その時の印象を、『一蓑一笠』（イッサイ　イチリュウ）という著書に、「瀧は、松笠村の龍頭滝が第一也。否、出雲にて瀧らしきものは、是のみ也。この瀧日光に持ち来るも、第十番以内にはあるべし。」と記しています。

彼は、日光の滝は見尽くしたとも言っています。その、明治大正の大旅行作家、桂月をして、「日光に持ち来るも、第十番以内」に入ると言わせたのですから、龍頭が滝には魅力が満載なんですね。（続く）

大正七年夏特に著者に送られたるもの




◉瀧は、松笠村の龍頭瀧が第一也。否、出雲にて瀧らしきものは是のみ也。この瀧日光に持ち来るも第十番以内にはあるべし。されど東京よりわざ〳〵見に行く價値なきことは言ふまでもなし。彌山、旅伏山、佛經山、一畑山、茶臼山、星神山など出雲にて閑ある時は、一遊して可也。

◉日本人は月を愛すされど未だ太陽の景を愛するを聞かず。余は天然の景致に於て最も日出、日没の景を嘆美す。此際太陽は燭身する光線なくして水に映じ、雲に映じ、其色の陰

左が桂月。
田中貢太郎 著『文豪大町桂月』, 青山書院, 大正 15.　国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/983286（参照 2025-01-11）
中央、右は一蓑一笠。
大町桂月 著『一蓑一笠』, 博文館, 明 34.2.　国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/888959（参照 2025-01-17）